

豊かな看護

福岡県
福岡市

社会福祉法人今山会

特別養護老人ホーム寿生苑

「できる」を引き出す看護を

福岡県西部、博多湾に近い住宅街に、特別養護老人ホーム寿生苑がある。ここで、ことし3月まで施設長を務めていたのが朝野愛子さんだ。現在も、母体となる社会福祉法人今山会の統括施設長として各施設を支えている。

寿生苑の入居者の平均要介護度は3.6。必ずしも高くないが、近年は歩行などが可能な認知症の高齢者が増え、徘徊（はいかい）などもあって職員の負担は大きい。特に、入所してすぐは行動が落ち着かない人も多いが「外に出て行こうとするのを無理に止めず、職員も一緒に散歩をしたり、軽作業を手伝ってもらったりすることで、徐々に暮らしに馴染んでもらうようにしています」とケアの方針を語る。

特養での看護の魅力を「入居者の尊厳を保ちながら、本人が自分で決定し、自分らしく生きることが支えられる点」という朝野さん。80代で胃ろうのある女性が入所した際には、希望を確認した上で、経口摂取への移行に取り組ん

だ。歯科医師の診察を経て、歯科衛生士や理学療法士が口腔マッサージや座位を保持する練習などを実施。看護師が継続して全身のアセスメントをしながら、管理栄養士や介護士とも協力して、大好きなフルーツが食べられるようになった。その後、この女性は家族と一緒に外食に出るなど社会との接点が増え、生活する上での意欲の向上にもつながった。入居者の生きる力を引き出すことは、生活そのものを看ることができる特養でのケアの醍醐味（だいごみ）だ。

朝野さんは「多職種が連携するときには、ご本人にとって何が大切かを考えることが必要」と指摘する。「先ほどのケースでは、ご本人や家族も諦めかけていたニーズを見だし、皆で協力して実現することで、職員側もやりがいや勇気をもたらしました」と振り返る。また、看護の役割について「介護の現場では、看護師が『できない』と言えばそれまでになってしまいます。根拠を持ってリスクを話し合いながら、皆で入居者のニーズの実現を目指すことが重要です」と、柔軟な気持ちで一歩を踏み出すことの意義を訴える。

関係者をつなぎ、思いに寄り添う

寿生苑では、年間7～8人の看取りを行っている。指針やマニュアルを整備し、入居前から本人や家族と最期までの治療方針を話し合うなど、対応には気を配る。しかし、実際には家族が治療をあきらめきれなかったり、容態がたびたび変わって方針を決めかねることもある。

そうした経験を多く持つ朝野さんは、看取りのときに関係者の間をつなぐことを意識している。施設の管理者として少し離れたところから、家族の背景や関係性などを基に職員に助言



入居者と気さくに話をする朝野さん（左）とスタッフ

する。現場の職員から直接、家族に伝えづらいことがあれば、朝野さんが代わって話をすることもある。ほかにも、医師との連携や看取りに対する施設内の体制強化など、果たす役割は大きい。「本人やご家族が納得できる最期を迎えられるよう、気持ちの揺れを受け止め、意思決定を支えたい」と話す。また、必ずしも、本人と家族の思いが一緒だったり、職員に本心を言えているとは限らないことから、ふとした一言や暮らしぶりから、それぞれが抱えている思いに気づき、フォローするのも大切な役目だ。

4月から統括施設長になったことで、今後は人材育成にも力を入れたいという朝野さん。新たに「マイスター制度」を設け、まず介護職から導入する予定だ。食事、排せつ、入浴、移乗など分野ごとにチェックリストがあり、3段階で評価する。職員のレベルを可視化し「プロフェッショナルへの意識付け」をする狙いのほか、継続的な育成や客観的な評価に役立てる。

「在宅や施設での看護はクリエイティブで、できることも無限大です。自律的に目標を持って取り組める人を育てたいですね」。これからも職員一丸となって、入居者一人一人を支えていく決意だ。

施設概要 職員構成：看護職（常勤6）、理学療法士（常勤2）、ケアマネジャー（常勤1）、介護職（常勤15・非常勤23）／入居者80／入居者平均年齢86歳／平均要介護度3.6

